

「75歳からの祝福」

創世記 12 : 1 - 4

October.5.2025

創世記 12 : 1 - 4 (パワポ)

Preface

一昨年まで「高齢者顕彰礼拝」という名称で献げてきた礼拝を、去年から「グランドジェネレーションデー」と名称を変えて礼拝を献げるようになりました。

今朝は、去年もお話し致しましたが、もう一度、名称を変えるに至った経緯についてお話しさせて頂きたいと思います。

WHO（世界保健機関）では、65歳以上を高齢者と定めております。

65歳以上74歳以下の方を前期高齢者、75歳以上の方を後期高齢者としていますが、一昨年まで献げられてきました高齢者顕彰礼拝の「高齢者」という言葉は、75歳以上の方々を意味する言葉として用いてきました。

また、高齢者顕彰礼拝の「顕彰」という言葉を、辞書でその意味を調べてみると、「隠れた善行や功績などを広く知らせること。広く知らせて表彰すること」とあります。

つまり、高齢者顕彰礼拝は、「75歳以上の方々に敬意を表し、ともに生きられる恵みに感謝しつつ、その感謝の思いを、小さな心ばかりのプレゼントをお渡ししながら皆で、神の愛のうちに年を重ねる祝福を喜ぶ礼拝」ということになるのかなと思います。

もちろんここには、喜楽希楽サービスの働きの紹介と喜楽希楽サービスへの応援や祈りを皆で共有することも含まれます。

これまで、高齢者顕彰礼拝という名称で礼拝が献げられて来たことは、主の祝福であり恵みであると思います。

そんな中、「高齢者顕彰」という名称について、「違和感を覚える」という声が聞こえるようになってきました。

「75歳にはなったけれども、まだまだ元気だし、高齢者と言われることがあまりいい気持ちがしないんだよね… 顕彰されるっていうのも、何かしっくりこないし…」というようなお声をチラホラと耳にするようになり、ご指摘を受けることがありました。

そこで、6年程前から、礼拝企画委員会で、「高齢者顕彰礼拝」という名称に代わる新しい名称について毎年話し合ってきました。

「高齢者祝福礼拝」、「シニア祝福礼拝」、「シルバー世代祝福礼拝」、「喜楽希楽デー」、「喜楽希楽サービスデー」、または、私が先日訪問しましたある教会では、「ハッピーシルバーデイ」という名称で礼拝を献げておられました。

まあ色々と考えたのですが、最終的に「これで行こう」となりましたが、「グランドジェネレーションデー」という名称でした。

Part One

これまでの「高齢者顕彰礼拝」という名称は、そのすべてが漢字表記でしたが、「グランドジェネレーションデー」というのは真逆と言いましょうか、表記のすべてがカタカナなので、その変化に、ちょっとびっくりされるのではないだろうかという憂慮がありました。

でも、「マナデー」や「森学デー」というように、「デー」が付く礼拝がめぐみ教会では毎年のように献げられていますし、「イースタータイド」や「アドベント」、「クリスマスグルーヴ」というように、これまでもカタカナ表記の礼拝が献げられてきましたので、それらと同じように受け入れて頂けるのではないだろうかという結論を出しました。

そして何と言っても、その意味、「グランドジェネレーション」という言葉の意味が素晴らしく、これまでの高齢者顕彰礼拝という名称で献げられてきた礼拝の意図するところが、その言葉の中に十分に含まれているだろうと思えるばかりか、それ以上の意味合いまでも加味されているように思えました。

「グランドジェネレーション」という言葉は、一見しますと、英語のように思えますが、実は和製英語で、元々英語としてある言葉ではありません。

ある著名な放送作家・脚本家の方が作った造語です。

定年後の第二の人生を行動的かつ積極的に楽しむ人々を指す言葉として考え出された造語です。

「グランド」という言葉は「最上級」を意味する言葉で、「高齢と言われる年代を人生の中でも最上の世代と捉えなつつ、健やかに年齢を重ね、豊かな知識と経験を持ちながら、その人生を楽しむ」という願いが込められた、年長者を敬意をもって表す言葉が、「グランドジェネレーション」という言葉なんです。

礼拝企画委員会では、この「グランドジェネレーション」という言葉を敢えて日本語表記にして、「最上の世代祝福礼拝」という名称も考えたのですが、ちょっと仰々しい言いましょうか、重々しい感じがするので却下となりました。

私たちの身近ですと、お隣のイオンモールでは、このグランドジェネレーションというコンセプトに賛同して、10年程前から敬老の日を、「グランドジェネレーション」の頭文字を取って「G.G.デー」と呼びながら、キャンペーンを展開しているそうです。

(決して「ジジーデー」ではありません。)

そして何よりも、なぜ、「グランドジェネレーションデーで行こう！」となったのかと言いますと、聖書は、高齢であることを消極的に語ることはないということです。

むしろ、高齢ゆえに神様に用いられ、人々を祝福へと導き出す働きを担った神の人や重要な登場人物が少なくないということ、結果的に、主なる神にあってその高齢が最上の時となった信仰の先達たちが聖書の中に記録されているということでした。

Part Two

先程お読みしました創世記 12 章に登場するアブラムも、正に 75 歳という、今で言いますと後期高齢の年齢を起点にして、人生が大きく神の手によって変えられた人でありました。

「わたしはあなたを祝福し、あなたが祝福となり、この世界の、全世界の全世代の人々があなたを通して祝福される。あなたは、神であるわたしの祝福の起点となる人物として、わたしが選び出した」と、目に見えるもの目に見えないもの、天地万物すべてをお造りになった主なる神様から約束を頂いたのが、75 歳を迎えたアブラムでした。

興味深いのは、75 歳以前のアブラムには、こんなお言葉を神様はおかけにならなかったということです。

75 年間この地で生きて来たアブラムでなければならなかったということでしょう。

アブラムへの祝福の約束の言葉は、何をもってしても推し量ることが不可能な人類にとって最も大事で、最も壮大な、究極的な神の救いの御業でした。

人類を、永遠の滅び、燃えるゲヘナ地獄に落ちて永遠に苦しまなければならないという罪の報酬から救い出し、贖い出し、人々の生き方を変えなせるためにこの地に来られた神の御姿なる救い主イエス様が、このアブラムの子孫としてお生まれになったことで、この約束の御言葉の最終的な成就に至りました。

神さまが人のために為さることは、ひと月、ふた月、または 1 年 2 年という短いスパン、例えば、私たちの急急とした祈りに速やかにお応え下さるというようなことよりも、聖書を見ますと、100 年単位だったり 1000 年単位だったりするような、人生 100 年にも満たないことの多い私たちにとっては中々想像しにくい時間のかけ方をしておられます。

話のスケールが大きすぎて、ちょっとピンと来ないところもあるかもしれませんが、当のアブラムにとっても、「何で今なんでしょう？ 何で私なんでしょう？ もし私だったとしても、もう少し若い頃の方が力もあれば、将来性だってあったでしょうし、何でわざわざ、年老いた今の私なんでしょう？ しかも救い主の誕生とは！？」というような迷いや疑問があっただろうことは、他の聖書からも想像することが出来ます。

さらに、創世記 12：7 を見ますと、

創世記 12：7 (パワポ)

主はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」

と、75歳にして一人も子どものいないアブラムにとって訳の分からない言葉を、神さまはアブラムに下さいます。

ただでさえ、年老いた自分を選び出しお立てになったと戸惑っているのに、拍車をかけて訳が分からなくなったのではないだろうかと思います。

その後25年間子どもが与えられず100歳になったアブラムに、もっと具体的な訳の分からないことを、神さまはお告げて下さいました。

何をお告げなさったかと言いますと、「わたしは、年老いたあなたと同じように、90歳の年老いたあなたの妻サラとの間に、男の子を与える」という言葉です。

アブラムもサラも、この神様の約束の言葉が信じられず、神様に向かって口答えし、「そんな馬鹿なことがありますか?!」と心の中で笑いました。

有限な限りある私たち人間からすれば、まあ当然と言えば、当然の反応だったと思います。

でも、神さまからすれば、人間の力が一切及ぶことのない、可能性が全くないその時こそが、そのアブラハムの年齢こそが、神が神であられることを私たち人間にお示しになり、教えて下さる最適な時だったということでしょう。

使徒パウロの告白が思い出されます。

「私は、キリストのゆえに、弱い時にこそ、強いのです。もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。私たちはキリストにあって弱い者ですが、神の力によってキリストとともに生きるのです」という、「何の力も及ばないその時こそが、神の時である」という使徒パウロ先生の告白が思い出されます。

肉体的にも、精神的にも、あるいは霊的にも弱っている時こそ、主の時です。

ある意味、年を取る重ねて出来なくなることが少しずつ増えていくというのは、主の時が表れるチャンスが、否応なしに開かれる時だとも言い換えることが出来るのかもしれない。

ある時、色んな思いに打ちのめされて、体中の力が抜けて力が入らない脱力感でベッドから起き上がれなくなってしまったことがあったのですが、妻から、「じゃあ、祈ればいいよ。『出来ません』って祈ればいいよ。そこから始まるんじゃない」と言われました。

「そんなの分かってるよ。分かってても出来ない、祈れないから辛いんだよ」と心の中で思いながらも、じわっと、「そうだなあ」という思いが、光一つない暗闇の中に、小さな光が差し込み始めるかのように湧き上がってきました。

何だかんだ言って、「僕がやるから、神様はそれを助けて下さい」という心持ちで、毎日を、日々を生きている。

結局、自分の力に頼ろうと、自分の思い、自分の考え、自分の正しさ、自分の優れた点、自分の誇りや自慢、自分の能力をより際立たせようとして、挫折し、くじけ、失望し、ダメだと決めつけている。

神様の力が表れる隙間さえも譲ろうとしない、認めたくない。

「神により頼む」と言いながら、実のところ神を利用し、自分の願うところを達成させ、成就させ、その達成と成就の度合いによって、「祈りが聞かれた」とか「聞かれなかった」とか、「与えられた与えられなかった」と言いながら、「神の御旨通りに」と思い違いをしてはいないだろうか、私自身日々問われているように思います。

でも、そういうことを問われるということこそが、まことの神を、イエス・キリストを信じながら生きる、「私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」という霊的事実を事実として認められるようになる恵みの過程なんだと思います。

そういう意味で、年を取る、年を重ねるというのは、物理的にも肉体的にも衰えを覚え、誰もが否応なしに、自分の弱さと向き合わなければならない状況を作り出されて行くことなんだろうと思うんです。

一見するとマイナス要素のように思えてしまうかもしれないことが、まことの神を主イエス様を信じる信仰のうちにあっては、主なる神様の力、誉れ、勢い、知恵、栄光を経験させられる機会が広がることなのではないだろうか、聖書の御言葉から教えられる気が致します。

肉体的な衰えを感じれば、以前よりも「死」を近く感じるでしょうし、死を感じれば、その先にいのちがあるのかないのかを考えたり期待せずにはいられないでしょう。

自分の意志に反して死に向かっている自らの無力さを認めざるを得なくなるでしょうし、自分のいのちだと思ってきたいのちが、自分の思い通りにならないという現実の前に、「いのちを司られているお方がいるのではないだろうか、いるはずだ、いやいや居てもらわなくては困る、この人生報われたい。居るならば、その方により頼みたい」と否応なしに、または自然と思ってしまうような、神との出会いのチャンスへと導かれて行くのが、年を重ねる、年を取るということなのかもしれません。

Part Three

モーセもそうでした。

イスラエルの民を導き上るリーダーとして神に呼ばれ召し出された80歳という年齢は、詩篇90篇でモーセ自身が、「私たちの齢は70年、健やかであっても80年。そのほとんどは労苦とわざわいです」と詠っていますように、モーセにとっては、「今死んでも、明日死んでも何らおかしいことはない」という死を意識しながら、毎日を生きるような年齢でした。

実際にモーセは、神様から、「わたしは、８０歳のあなたを用いて、２００万人以上のイエスラエル民族をエジプトの奴隷という身分から導き出す」と言われた時、アブラムと同じように、「そんな非現実的な馬鹿なことは仰らないで下さい。今の私には何もないどころか、いつ死んでもおかしくないような日々を生きている一老人ですよ」というような反応を示しました。

ところが、それから４０年間１２０歳まで主にあって健やかで、しかも１２０歳でモーセが亡くなる時の状態は、

申命記３４：７（パワポ）

という状態でした。

つまり、どんなに自分で自分の死を覚悟し意識したところで、自分のいのちを終えることなんか出来ない。

逆に、目もかすまず、気力も衰えていないほどにどんなにピンピンしていても、「そこまで！」と神さまが仰ったらそのいのちはそこまでという、いのちのすべて、またその可能性のすべては神の御手の中にあるということです。

４０歳という年齢で、人生最大の挫折と失敗したという思いを抱え、特段書き残すようなこともなく４０年を生きていつの間にか死を意識する８０歳になったモーセに、神様は不思議な形で現れなさいました。

火が付いたらあっという間に燃え尽きてしまうはずの柴の木が、いつまで経っても燃え尽きることなく、煌々と燃え輝いているただ中に現れなさりながら、主の御手の中にある人のいのちの有り様を示して下さいました。

出エジプト記３：１－６（パワポ）

自らの死を意識する年齢になったモーセに、神様は、人のいのちは神の御手の中にある時こそ最善であり、主の御業を期待し、主の御心を生きようとする時に輝き、いのちの本質を味わわせて頂けるということを教えるかのように、燃え尽きない柴の中に現れ下さいました。

「私たちのいのちは、神の御業がそのいのちを通してなされている時、すぐ燃え尽きてしまうはずの芝が燃え尽きないように燃え続け、神の御心を成させて頂くということゆえに幸いであり、条件に左右されない喜びを喜び、与えられたそのいのちは最善のいのちなんだということを実感出来るものなんだ」と、８０歳で不思議な体験をした後主とともに生きたモーセは、その生き様を通して、いのちの実体験を通して、今を生きる私たちにも教えて下さっているように思います。

肉体的な衰え、または精神的霊的な衰えを覚えることは、神の御手にあっては決して悪いことではなく、むしろ、神の時であり、神が待っておられる時で

もあり、神を知る時でもあるんだということを教えられるように思います。
このことを、詩篇 92 篇ではこう詠います。

詩編 92 : 14 (パワポ)

さらには、ダビデの告白です。

詩篇 71 : 17-18 (パワポ)

「神よ、あなたは私の若い頃から私を教えて下さいました。年老いて、白髪頭になっても、神よ、あなたは私の神です。」

グランドジェネレーションデー。

10、20、30、40、50、60、70、80、90、100歳、110歳、120歳、何歳をもって、グランドジェネレーション（最上の世代）とするのかは、人によって違うのかもしれませんが、聖書が、またこの詩篇の賛美が私たちに教えて下さる一つの事実は、神に生きるなら、主イエス様に生きるなら、御言葉に生きるなら、そのすべてがグランドジェネレーション、最上の世代だということです。

どうすることも出来ない困難や苛立ち、身から出た錆なのか、自分ではどうすることも出来ない定めのような導きなのか、衰えなのかそれ相応なのか、耐えるべき苦難なのか突破を試みる壁なのか、無力なのか非力なのか、受け入れるべきなのか抗うべきなのか、何とも表現し難い人生の道のりを歩む中で、私たちが聖書から教えられる一つの事実は、それすべて、すべてが、イエス・キリストの内にあるならば、最上の世代、グランドジェネレーションだという約束です。

アブラムも、モーセも、それぞれに75歳、80歳という所謂高齢の時、神に出会いました。

ダビデは、一生涯を神とともに歩みました。

彼らの人生には、大きな苦難だったり、再び立ち上がれそうにもない挫折だったり、無力さだったり、非力さだったりがありましたが、その人生すべてが、三位一体なる神にあってグランドジェネレーションでした。

Conclusion

病に倒れて、以前のような生活がお出来になれなくなったご高齢の方を訪問した時のことです。

「どんな顔して、どんな表情でお会いすればいいのだろうか」と悩みながらその方にお会いしに生きますと、逆に、「何でそんな心配そうな表情をされているのですか？」ということを語り掛けられているような明るい表情で出迎えて下さいました。

そして、こう仰るんです。

「以前のように行きたい時にいつでも教会に行けなくなってしまいましたし、体だって以前のように自由に動かすことが出来なくなってしまいました。本当に私は今、幸せです。

これまで聞いて来た主日礼拝のメッセージを頭の中で思い返しては再び味わい、これまで蓄えてきた聖書の言葉を暗唱し、イエス様に語り掛けるんです。こんなに24時間ず〜っと、イエス様との語り合いの中にいることなんか出来ませんでしたので、今が幸せです。」

この方は、私に、年老いて白髪頭になっても、喜び勇んで、神の力を、神の大能のみわざを告げ知らせて下さいました。

人にとっての最上の世代・グランドジェネレーションは、その人がイエス様とともに、イエス様の言葉に、イエス様のうちに、そして、イエス様がその人のうちにいて下さるということに掛かっています。

75歳以上でも、75歳以下でも、すべて、主イエス様のうちにあるならば、グランドジェネレーションです。

主イエス様にあつて、私たちともに、グランドジェネレーションを生かされている祝福を噛み締めながら、また新たな一歩を踏み出していけたらなあと願います。

お祈りいたします。

祝福：創世記12：2「あなたは祝福となりなさい」